

今回は、外科長兼内視鏡外科長の佐藤佳宏医師にお話を聞いてみましょう。

Q がんのリハビリテーション（以下、「リハビリ」）について教えてください。

A がん医療は徹底的な腫瘍の消滅を目指したことから、がんとの共存を視野に入れた方向に大きく変わってきています。そのため、がんによる体の障がいの軽減・ADL（日常生活動作）の改善を目的としたがんのリハビリの必要性は増大しています。

がんのリハビリとは、がんと診断された時からのあらゆる病期において、運動機能や生活機能の低下予防・改善を目的としてリハビリ治療を行うものです。たとえ治らない障がい等を持ち続けたとしても、患者さんのこころを豊かに保つことにより、QOL（生活の質）を上げることができるものです。

当院では、平成26年8月からがん患者リハビリテーション料の施設基準を取得し、周術期（手術の前後を含めた一連の期間）を中心にリハビリを行っています。研修を受けたスタッフがまだ少ないため、すべての病期のがん患者さんのニーズには応えられていませんが、化学療法中や終末期の患者さんに対するリハビリも徐々に増えてきています。今後もがんの患者さんのQOLを重視したがん医療をさらに向上させていきたいと考えています。がんと診断された時から天寿を全うされるまで、緩和ケアチーム・栄養サポートチーム・リハビリテーションチーム・医療相談室・病診連携チームなど、それぞれのスペシャリストたちがかわって、がんの患者さんとそのご家族が自分らしく生活できるように病院全体で支えていきます。

